

## お母さんの代わり

広橋 こはる

「お願いしたい事があるの。お母さんのお仕事、覚えてくれるかな。」

夏が近づくころ、母の体調が悪くなり、しばらく入院をして手術をする事が決まった。私は生まれて10年間、母とずっと一緒だった。妹が生まれた時でも、母は4才だった私にさみしい思いをさせたくないと自宅での出産を選んでくれたぐらい、私は母のそばにずっといた。私も妹も、母がいない夜を過ごした事が無かった。

たくさん不安はあったけれど、私が母の代わりにできる事を教わった。今までも手伝いをする事はあったが全て一人でやるとなると分からない事が多かった。洗たく物にしても、洗いや干し方、服をたたみ、タンスにしまうまでけっこう大変だった。お料理もやけどを何度もして、いやになった。今まで楽しかったのは、一緒にそばで見てくれる母がいたからだと気がついた。

夏が来て、入院の日が近づいた。洗たくも料理もそうじも覚えた私に母はこれで安心して

病気を治せるねと笑顔で言ってくれた。

次の日の事だった。母が私と妹の前で動けなくなってしまった。まだ父も帰宅していない時間で、いたみをこらえながら母は私に病院に電話をして、おとなりの人を呼んでほしいと頼んだ。母はその夜のうちに緊急手術となってしまうた。全身ますいという薬で目の開かない母を見て、妹はずっと父にだかれて泣いていた。私は泣きやまない妹の横でただ立っていた。

手術が終わり、たくさんの管をつけられた母を置いて父と妹と家へ帰らなければならず、想像をしていたよりもつらい気持ちでいっぱいだった。眠れないまま朝がきた。

母のいない家、どこか静かな空気が流れる。面会に行けるまで私は母から頼まれた仕事をもくもくと始めた。早く母が元気になって帰ってこれるように、私が代わりに頑張ると決めたから。

今まで、母にしてもらっていた全てを感謝できた経験だった。

入院中、母が私に手紙を書いてくれました。私がいってくれて本当に助かったよ。ありがとうと書いてありました。私こそありがとう。

母の戻った家には明るい笑い声がひびいています。